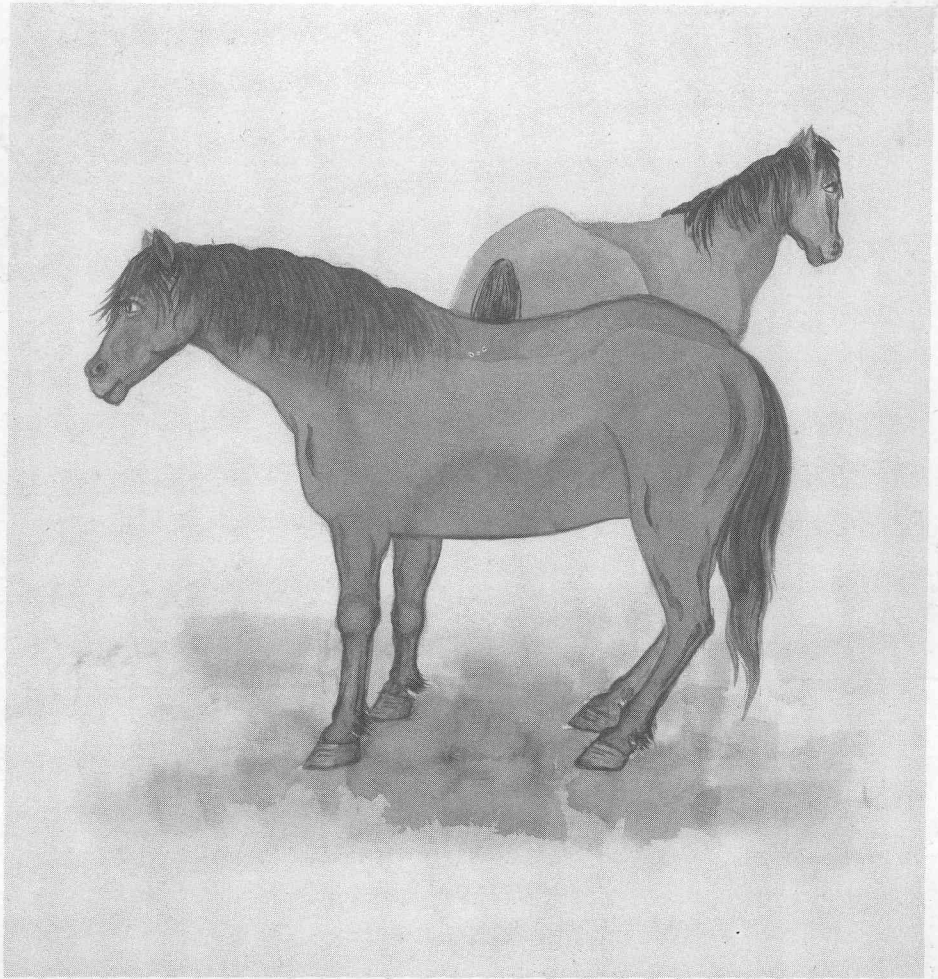


季刊

連句

第28号

平成二年三月一日発行



芭蕉の後継者たち（南柏雑記 26）…………… 1
 「鳶の羽も」の巻 鑑賞（Ⅶ）……………東 明雅………… 2
 校合報告（半歌仙 秋麗）……………鈴木春山洞………… 4
 鉦の刃の砥ぎ方（二十韻 暮の市）……………式田和子………… 6
 校合の過程（歌仙 聖夜なる）……………坂本孝子………… 10
 「蓑虫」付勝練習二十韻 …………… 14

第三十二回 猫蓑会 歌仙六卷 …………… 16

捌 氏原正雄 下坂元子 中川 哲
 東 明雅 福井隆秀 山崎一恵

花の句について……………東 明雅

逗子連句会 歌仙二卷 捌・文 東 明雅 本屋良子 …………… 22
 渋谷連句会 歌仙三卷 捌・文 東 明雅 大窪瑞枝 下坂元子… 24
 興流連句会 二十韻一卷 膝送り・文 馬場彬風…………… 27
 柏連句会 二十韻一卷 捌・文 久保田庸子…………… 28
 雁帛往来 …………… 29
 新刊紹介 …………… 28

芭蕉の後継者たち

雅

南 柏 雜 記 26

「はいかいの継句をまなばんには、まず蕉翁の句を暗記し、付三句のはこびをかうがへしるべし。三日、翁の句を唱へざれば、口むばらを生ずべし」（俳諧の付句の方法を知るには、まず芭蕉翁の句を暗記し、付方・三句の転じ方を考え知らねばならない。三日も芭蕉の句を唱えないと、口の中に茨が生じるであろう）

右は蕪村が安永五年に刊行した「芭蕉翁付合集」の序文の一節である。主として七部集の芭蕉の付句を抜き出したこの本は、芭蕉俳諧の神髓を知らしめようとしたもので、いかに蕪村が芭蕉の俳諧に傾倒していたかを端的にあらわすものである。

蕪村だけではない。彼の門下すべてが、芭蕉俳諧を最上とし、その復興をもって自己の使命と考えていたことは、蕪村のあとを襲いで三世夜半亭を名乗った高井几董などに最もよくあらわれている。安永五年当時、蕪村はもう還暦

を過ぎた六十一歳の翁であったが、几董はまだ壮年の三十六歳である。私はひそかに、この「芭蕉翁付合集」は几董その他の夜半亭の俊秀が纏めたものを、蕪村が序文を書いて、監修という形にしたのではなかったかと考えている。

蕪村は天明三年（一七八三）六十八歳で没したが、そのあと几董は、師の遺志を果すべく天明五年江戸に下って、「統一夜松」を編集し、師の旧友大島蓼太のすすめで、夜半亭三世を襲名し、翌天明六年には俳諧式目書の中で不朽の名著と言われる「付合手びき蔓」を刊行した。「付合手びき蔓」は付合の古い名目にあてはめつつ、作法・心得を説いたもので、別に私説として彼独自の斬新な説明を加え、旧師蕪村との両吟「桃李」などから多くの用例を出して、蕉風付合の実体を分りやすく説いている。

具体的に言えば、自他・体用・人情・景気の違いをきちんと立てて、一卷を綴る方式がここで確立されているのであるが、彼もこの書の序文で言っているように、俳諧の道は単に本を読んだだけでは分からぬことが多く、すぐれた人に出会って、席をかさね議論を聞いて、惑いを解き、その後自分で会得してはじめて、俳諧を知ることができるのである。彼が寛政元年（一七八九）四十九歳で没した後は、夜半亭の正統は絶えてしまった。もすこし、長生きをして有力な後継者を育ててくれたならばと、いつも惜しみ思うことである。

「鶯の羽も」の巻 鑑賞（Ⅶ）

東明雅

22

火ともしに暮れば登る峯の寺

ほととぎす皆鳴仕舞たり

（夏。ほととぎす。人情無）

芭蕉

（現代語訳）日が暮れると御燈を灯しに山上の寺へ参るその道で、よく時鳥が鳴いていたが、今はもうその時節も過ぎたか、すっかり聞けなくなってしまった。

（付心）遣句其場の付。また時節の付でもある。

（付味）前句の寂寥孤独の感じが、付句の時節の過ぎ去るのを歎く気持とよく匂い合っている。

（転じ）打越が冬の北風の寒さであるのに対して、付句は夏の終りの時鳥で、ここに大きな転じがあり、気分も打越・前句にはきびしさがあつたが、これは句調も軽く、気分ものびやかになり、余裕が感じられる。

（補説）遁句とはこの句のように、会釈とほとんど同じだが、会釈よりもいっそう軽い句を付けるのをいう。人情の句が続いて一巻の進行にねばりが出てきた時、あるいは前句がきわめて難句で付けにくい時などに、時節・時分・

天相・時宜などの言葉で軽く受け流すものである。遁句を作るのは一見たやすいように思われるが、この句のように適当な場に適当な遁句をすることは極めて難しい。この巻には既に裏の六句目に「芙蓉のはなのほらくとちる 史邦」というすばらしい遁句があつたが、この「ほととぎす……」の句は、表面はただ何事もなく軽く言い捨てているようでありながら、裏には無限の余情がこめられている。このようにすぐれた遁句がところどころに嵌めこまれているのも、この一巻の気分を転じ、巻面に変化を与えた第一の要素である。

人情の有無を考えると、打越「雪けにさむき嶋の北風」が人情無、前句「火ともしに暮れば登る峯の寺」が人情目、それにこの付句が人情無であるから、人情目の句を人情無（場）の句で挿んでいる形であつて、このように人情の句を一句で捨ててすぐまた人情無にすることは現在には嫌われているが、「猿蓑」のころはそのような嫌いはなかったようである。人情無の打越を嫌うのは、先に述べた北枝の「付方自他伝」が作られて以後のことであつた。

ほととぎす皆鳴仕舞たり

瘦骨のまだ起直る力なき

史邦

(雑。人情目)

(現代語訳) ひとところ盛んに鳴いていたほととぎすも今はさっぱり鳴かなくなつたが、長患いに痩せおとろえたこの体は、まだ起き直る力さえない。

(付心) 起情。

(付味) 前句の「鳴仕舞たり」という感傷の余情が、病後の気力なきの「まだ」…「…なき」という詠嘆に移っている。移りの付。

(転じ) 打越の釈教の句が一転して病態の句に変えられ、また、戸外の景から室内に変わっているところも、転じとして大きい。

(補説) ほととぎすは杜鵑と言ひ、また、蜀王の伝説に

時宜 じき 七名八体の中の八体の一つ。「時」は年(時代)・月(季節)・日(その日)・時刻(その日の時分)といった時間を表し、「宜」はその時やその折の場にふさわしいことをいう。時節や時分が時間を付所とするのに対し、時宜は前句のその折の風俗や出来事に目を付けて、その時を勘案しながらその時の場に合った状況・状態・条件などをもつて付けるところが異なる。これは、発句に脇句を付けるときに、その時その座の挨拶の意を込める辞儀とも通じ合うものであるが、時宜の一部として辞儀は含まれるも

基づいて、不如帰・蜀魂とも呼ばれるが、さらに冥途鳥・無常鳥などとも言われ、死、あるいは病にも関係が深い。

ほととぎすはまた、勸農鳥・田うえ鳥とも呼ばれる。

「七部婆心録」は、「前句ほととぎすの朝なく鳴て、農事を勧しも余所に聞て過し体と見立、長病人の懐を述たりやせ骨に未起直る力なきトハ、既に植付も仕畑田草とる時に臨たれど、我は仕事も得せず只喰ゐてと気をもむ老人の様也」とのべ、近代の注にも、これに類する説を出している人が居るが、そこまで限定しない方がよい。

ここで、雑の句になつたのは、前句の夏を一句で捨てたわけである。夏・冬の季語は二句続けるのが多いけれども、一句で捨ててもよく、また三句までは続けてよいことになっている。

さらに、人情目の句の打越である。この現象については、名残の表折立と三句目との関係について述べたのと同様である。

の、時宜を辞儀と同義に考えるのは通りである。いずれにせよ、前句に添うように軽く付けられるもので、多く会釈であると言える。各務支考は「今日も浮世の晩鐘を聞く／五月雨の美濃恋しくも旅に居て」(「東西夜話」)を証句として示している。これは「今日も」から連日降り続く五月雨や同じような状況にいる旅を想定し、「浮世の晩鐘」から鬱陶しい梅雨の夕方に思う旅中の感懐を導き出して付けたものである。

(連句辞典)

校合報告

鈴木春山洞

半歌仙 秋 麗

春山洞 捌

1	連れだてる二人ゐて秋麗かな	春山洞
2	昼月淡き団地公園	杣平
3	吾亦紅床の間の壺活け替へて	郁子
4	クレオン描く「かあさんのかほ」	千町
5	ガラス戸に音たて火取蛾ぶつかれる	平
6	一桶買ひし銘水を注ぎ足し	洞
7	只管打座碧眼の僧まだ若く	町
8	ビデオテープの貸し借りが縁	郁
9	誘ひ出す口笛メロディ聞き馴れぬ	洞
10	外せし指輪どこに置きしか	平
11	歴史今東西の壁壊したる	郁
12	酸性雨に枯るる森林	平
13	半月に兎の耳の立つ見えて	町
14	将棋さし了へ酒酌み交はし	郁
15	越天楽舞の姿のこもごもに	平
16	神憑りたまふ舟の霞もに	洞
17	山峡の入生田に咲く花枝垂れ	郁
18	八一の雛の歌は仮名文字	町

平成元年十一月十三日

於 柏市光ヶ丘近隣センター

「文台ひき下ろせば反故」を是とする意見が「連句研究」に公表されているが、これは異を唱えるに過ぎないと思う。古来、連句に開かれた「校合」の道は、素晴らしく尊いものである。連句が捌の文学と呼ばれる所以もここにあるので、「文台ひき下ろせば反故」を是とする考えは、捌の校合作業の放棄を意味するもので、「連句」の文学性・詩の否定に繋がるものと思ひ賛成出来ない。

従来、連句の発表作品は、全ての作業を水面下に沈潜させて来た。それはそれで良い。変更させる必要はない。しかし仲間内では、一座を形成した連衆の間ぐらいでは、話し合っても良いものではないだろうか。後学の老書生で田舎で燻っている者としては、これを機会に御教導ねがいたい気持の方が強い。宜しく御願ひします。

1. 発句・原句木の下に二人ゐる秋麗かな

発句が、ぐらぐらするのは見苦しい。捌を仰せつかって瞞目の句を提出した。敢えて句帖の句を避けた。第一変更は17の付句を得て、上五を「連れだてる」と捌の立場から変更した。「木」と「枝」と隔ってはいるが「近さ」を感じた故である。中七「ゐる」を「ゐて」と変更したのは、全く春山洞好みである。しかし懸念がない訳ではない。

「て」の持つ中止感によって二段切れの恐れが生じるのではないかの点だ。

4. 四句目・原句クレオン描く顔はかあさん。

これは捌きの中で一直した句である。しかし此句の原句の素晴しさを、校合しながら発見した。先ず公園(ん)

と4かあさん(ん)の尾形打越の障りに気付いた。次は、歴史仮名遣の中に現代仮名遣・話し言葉・幼児語の混入という問題である。小学校の低学年の教室の後壁に貼り出されている「かあさんのかほ」顔・顔である。そこで「で「かあさんのかほ」を挿入した。がここでの問題点は、2団地公園(名詞)とかほ(顔・名詞)の打越である。今は、どうしようもない。

5原句・大玻璃戸音たて火取蛾ぶつかれる。

佳句である。前句のカタカナ言葉を受けて「ガラス戸に」と平凡な表現に一直した。「大玻璃戸」の持つ高い俳諧性を失ったことは痛い、おだやかに運ぶ表六句の意図は護られたのではないだろうか。

10原句・外した指輪どこに置きしか。

上五(外した)は口語表現であるので、文語表現に改めた。捌の見落しである。御容赦下さい。

11原句・歴史今東西の壁壊さるる。

現在(今)を中心に詠えば「壊さるる」の表現が佳いのは事実である。が、歴史的現実感を詩として客観的に詠いとるためには、現在完了の助動詞「たり」の連体形「たる」の使用もあってよいと考えた次第である。

13本巻には動詞「たつ」の語を三回使用し、ここ13で漢字「立つ」を使用している。実際は減らしたいが、暫くこのままにして置こう。

15原句・越天楽舞の姿の眼ナ底に。

佳句である。思わず息を呑んだ秀句である。すばらし

い一句ではある。ここで我が儘を言わせていただと春山洞は「全巻同字去り」の立場を堅持している、7「碧眼」と訓みは異なるが同字であることを、後になって発見した。懊悩した。7とは隔っているし、訓み方も異なるし、可としてもよいと思つたが、敢えて、一直を試みた。前句との付合を重視して――。

16原句・神憑りたまふ舟のたゆたひ。

前句の素晴しさに触発された。が半歌仙(愛媛)は、「花」を含む春季三句を規定しているので、敢えて、季語「霞める」と挿し替えることとした次第である。

後記

会席の端に寄せていただくつもりで楽しみに出席したが外れた。お捌を仰せつかった。戦慄に似た緊張感が走った。腹をくくって坐る。猫蓑会の素晴しさは捌の治定まで付句が出続けることである。それと付合の具合が「詩」として、ぴしっと定まっていることである。小市民的雰囲気詠った発句に出発して、古今・東西・地球的視野に立つての諷詠は爽やかであった。何もかもが斬新で、俳諧冥利につきる思いを深くした。柚平先生の尽きることなく、次々と繰り出される、息もつかせぬ付句の妙には感嘆した。そして後学の捌に対して、適切なアドバイスを与えられた。それは厳しい愛の鞭と有難くいただいた。座の中で交わされた雑談も楽しく明雅先生の御高配有難く勉強させていただいた一日であった。

鉋の刃の砥ぎ方 式田和子

二十韻暮の市(初稿)

和子 捌

- 1 見し人も声かけずなり暮の市 健悟
 2 裸電球揺るる寒風 守男
 3 箱の猫子等次々に抱き上げて 隆一
 4 九文三分の靴きつくなる 和子
 5 金星の蝕のかかりし月仰ぐ 夫
 6 逢瀬最後と酌みし中汲み 悟
 7 若い娘にグットバイされ美術展 夫
 8 アブストラクト眼鏡取り替え 男
 9 帆船のきらめき競ふ入海に 一
 10 天道虫はいきなりに飛ぶ 悟
 11 夏やすみ御岳詣では老父ナホを連れ 男
 12 ウォークマンの音もしぼりて 同
 13 壁越しに囁く気配誰ならん 同
 14 逃げた夫につひに掴まり 悟
 15 こんにやくを並べて干して寒の月 同
 16 ぎっくり腰と仲の良き日々 男
 17 長距離のトラックの行く轟々と 夫
 18 お玉杓子の水のこぼれる 一
 19 角帽の記念撮影花万朶 男
 20 おめでとうさん囃りの中 夫

捌きをするときは、自・他・場は注意しつつ冷定し、連衆も口々に意見をいい、打越し、四・三なども気をつけながら巻くが、それでも校合のときには多くの欠点を発見するものだ。いつもは、一応校合した作品を連衆の方々に送り、ご意見ご希望があればお申し出戴きたいという葉書を同封し、それを参考に(必ずしもその通りにはしないが)、最終稿とすることになっている。当日の連衆は、佛淵健悟氏がACCで約十カ月。近藤守男氏が四宮で三回くらいを経験。若松隆一氏、木場田文夫氏はまったく始めてという構成なので、校合は先生のご示唆と、佛淵氏の意見を踏まえるだけにした。初心の方には膝送りで「こんどはこれを」という方法もあるが、連衆揃って少壮の男性なので、全句競って考えて戴きたいと思い、出勝にし、連句の約束事などは一句ずつ説明しながら出句を待った。従って力不足なのはやむを得ないと思うが、それなりに首尾するための捌きの考え方、また校合の結果どの程度鉋がかけられたか、ご参考になれば幸である。

3 原句 「箱の猫子等次々に抱き上げて」
 「子等次々」より「代る代る」のほうがより具体性が出、可愛い子供こどもの覗き込む姿が出ると思いい直し、治定したが、
 2 裸電球揺るる寒風 と「る」が並ぶ。これは健悟氏案で「揺らす北風」と出た。この付け合いは、明雅先生の「連句集 猫蓑」(永田書房刊)の「山茶花の巻」
 1 山茶花やむかし道中旅硯 時彦
 2 初時雨来る土の冷え冷え 明雅

3 十軒の商店街に客なくて

照敏

が頭に浮んだ。寒い風に重点を置くか、裸電球にウェイトをかけるかを考えたが、この「山茶花の巻」の2-3を、3-2と読んでみて、裸電球がポイントだが、風の働きにも場を与えても良いように思われたので「揺らす北風」で治定し、「る」の並ぶことを避けた。

4 この付は、猫を抱く子を兄弟と見立て、そのうちのひとりの会釈で、小学生でも大きい子もいて、親が「エ、もうその靴はけないの」とびっくりするくらいだ。まだ無邪気な子供だという気分を出したかったが、靴ということで、発句外、脇外。3で内に入ったのがまた外へ出てしまったのは作者の未熟なためである。「窮屈になるおさかりの服」では、さがるが裸電球のぶらさがっている気分にかかるか。「躰出して着るジャージーの服」では表四句に面白過ぎよう。1・2の剛に対して、3・4は柔で軽みのある展開を望むので、向付で親を出し、3の子供をひとりからませ「糸を通して重宝がられる」

5 脇に裸電球を治定したときに、さあ、月はどうしよう。裸電球が光ってしまおうし、夜になるので、第三に冬で月を出そうか、とも思ったが、内に入って、冬で、月で、人情を入れた句を出してください、といっても無理な相談なことは分っているし、冬三句は二十韻では重すぎる。5の月をこぼしても良いが、初心の方にはこの辺りに「月」をと始めは覚えられたほうが良いと判断して、月をお願いする。脇の「風」からは天象二句去りで式目に合っている

が、夜分は三句去りで二句しか去っていない。しかし、当日の興行が夜だったから、1・2を夜と見定めたが、裸電球がぶら下がっているだけなら必ずしも夜でなくても良からう。良い月が出た。新聞等では「金星食」となっていたが、どうしても感じが出ないのであえて「蝕」の字を使った。

9 原句 「帆船のきらめき競ふ入海に」美しい句が出た。8のアブストラクトの絵柄を判じようとする老眼鏡も俳味があって面白いが、それを拡大したらかくもあろうかという入り海の帆船の風景はこのまま採りたかった。5の月の句の金星蝕が月の雫のように美しくきらめいているのを相殺する懸念がある。ヨットの帆柱があちこちに入り乱れているようにとってよかろうと判断し、一直。「帆船のかたむきながら入海に」

10 次の天道虫は遣句、原句「天道虫はいきなりに飛ぶ」天道虫はまっ直に上へ上へと登る習癖があり、てっぺんまでいってバツと天を指して飛ぶから天への道の虫、天道虫という由、作者から説明があった。帆柱を天へ登るといふ景は、7・8の中年の哀感を吹き飛ばすような良い転じだが、いきなりに飛んでは登る動作が無くなってしまふ。案としては「天道虫は先へ先へと」これではそれからどうした——にならう。「天道虫はてっぺんを這ふ」でも、そこに到る道筋が出ない。結局「天道虫」のめざすてっぺんとなった。

11 原句「夏休み御岳詣では老父を連れ」てっぺんから来て良い付味と思つたし起情の句にもなっているが、「夏

休み」は子供くさいので「夏期休暇」と一直。御岳をみたけと読めば原句と字数が合うが、作者に尋ねれば木曾という。木曾なら御嶽。おんたけである。字数を合わせ「夏期休暇御嶽詣で老父を連れ」で治定した。

12 御嶽詣でなら「六根清浄」と唱えるのが常道だが、家族揃っての御嶽詣でについて来た息子は若者の常として必需品のウォークマンでロックなど聞いているだろう。祖父に遠慮して「ウォークマンの音もしぼりて」と音楽を出した。止は「て」か「ぬ」か。息子とせず一緒に登っている若者達も音をしばっているだろうと考えれば「ぬ」では限定されるのであまいさを残した。

14 ウラの恋句はグットバイされているので、ナオの恋はもう少し情緒纏綿として欲しいと注文を出し、13でうまく転じて秘やかな恋の場面が出た。14は、それが誰だろうという謎解きとなるが、意外性もありまた、現代風の味もある恋が出た。作者は句意からいって、「逃げ来し夫に」のほうが良いのでは——と意見があった。逃げた夫では逃げたが夫にかかる。「逃げ来し夫」にすれば主客ははっきりするし、意味の通りは良いと思ったが、情痴の俗っぽい響きを生かす語呂のほうを採った。「逃げた夫につひに欄まり」そのまま。

15 5の月も自、この月も自の句になってしまったが、5は下から仰ぐ月。15は上から光を浴びている月と変化しているのが治定。月の字も下に並ばずよかった。ここで、「寒の月」としているのので、をを北風にしたのが正解である。

17 花の近くには、高いもの、色の濃いもの、光るものは採ってはいけなさと人にも云い、自分も固く守っているのに、この句をふらふらと治定してしまったのは我ながらあきれた話である。いつも女性の多い席では絶対この句のような地響を立てて街道を轟進するような句は出ないので、何とかこの中上健次の「日輪の翼」というダイナミックな小説のような句が使えないだろうか。トラックを満艦飾に飾っては、9で帆船のきらめきを消した甲斐がないと深く反省。ここは述懐の句を出すところだが15・16が述懐気味の老体病体なのであえてそれは狙わないが、ナウの折立に勢の良すぎる句を出すのは遅すぎるかとも思ったが、15・16の湿った気分を転じるには使えるだろう。原句の、「て」止は3・12・17と三つあるのは多すぎる。ここで「て」をひとつ消すことも必要だ。音は四句去っているし、車も出ていないから「長距離のトラックの行く轟々と」ではどうだろう。しかし、14・「逃げた」と「行く」が歩行体で大打越となるか。「長距離のトラック続く轟々と」同じ風景ながら、言葉での打越しを避け、更に男臭くなった。ぎっくり腰は職業病と聞く。

18 原句は街道筋で子供の飼っているバケツの中のお玉杓子の水がゆれてこぼれると解し治定したが、次の花への付味が疑問であるところご指摘があった。19の花は、ご当地早稲田の角帽を付けている。「蜆汁の香ほのと漂ふ」「子持ち雀の拾ふパン屑」前句なら地方の町でひとりだけ早稲田に入学した男の子の家のあたりと見立ててもよく、また

外食々堂で食べた蛭味噌汁の香をちよつと残している運転手その人の付けと見てもよいと思つたが、19との付け味がまだ疑問だろう。後句で、15の田舎の気分を残してしまつた17から、やや都会風に転じ、大学校庭とも見立てられるため後句を採りたいが、15にこんにやくがある。「子持ち雀のちよつと飛び退き」これはすりつけているから飛びのいてもよかるうが付き過ぎか。「孕み雀の混る一群れ」これで少々離れ、トラツクの通る道から、校庭へ見立替えができると思う。治定。

20 「新人ばかりでも約三時間半くらいで一巻首尾しそうですね。おめでとうさん」と健悟氏が云い、それが文夫氏の「おめでとうさん囀りの中」とついた。しかし、発句に「声」という字がある。ここで「囀り」を使うと遠輪廻になり兼ねない。おめでとうに何がつくか。幸い「清明」が付いて、日にちの頃合いも良く「おめでとうさん時ぞ清明」めでたく首尾した。こういう挙句は捌きの好みでもある。

私自身の校合の方法は、先生にお習ひしたことを幽かになぞっているに過ぎない。「玉が転がるように」というお教えには何度も口に出して読んでみるのがいいが、字の重複などはそれだけではどうしても見落してしまう。ノートに書いたのを清書することによって発見する率も高いが、ワープロを使うようになって、仮名を転換して字を探すので「オヤ、この字は転換したナ」と気がつく率のほうが高い。「舌頭千転」も一法だが、それと併用して「書写百辺」も校合の匏の刃を砥ぐのに効果があるのではないだろうか。

二十韻 暮の市 (決定稿)

- 1 見し人も声かけずなり暮の市
- 2 裸電球揺らす北風
- 3 箱の猫代る代るに抱き上げて
- 4 糸を通して重宝がられる
- 5^ッ 金星の蝕のかかりし月仰ぐ
- 6 逢瀬最後と酌みし中波
- 7 若い娘にグットバイされ美術展
- 8 アブストラクト眼鏡取り替え
- 9 帆船のかたむきながら入海に
- 10 天道虫のめざすてっぺん
- 11^オ 夏期休暇御嶽詣で老父を連れ
- 12 ウォークマンの音もしぼりて
- 13 壁越しに囁く気配誰ならん
- 14 逃げた夫につひに攔まり
- 15 こんにやくを並べて干して寒の月
- 16 ぎっくり腰と仲の良き日々
- 17^オ 長距離のトラツク続く轟々と
- 18 孕み雀の混じる一群れ
- 19 角帽の記念撮影花万朵
- 20 おめでとうさん時ぞ清明

平成元年十二月十八日
於 卯の花連句会

健 守 隆 和 文
悟 男 一 子 夫 悟 夫 男 夫 男 一 悟 男 同 男 一 夫 男 一 夫 夫

校合の過程 坂本孝子

歌仙 聖夜なる (決定稿) 孝子 捌

平成元年十二月二十五日
於 四 宮 集 会 所

一	風狂や連句をまいて聖夜なる	瑞	枝	一九	油 ^ナ まぜ土間に片寄る野菜屑
二	ポインセチアの燃ゆる紅	和	子	二〇	先端機器を手内職して
三	落葉踏むタクシー待ちのしんがり	遊	敏	二一	純金の鎖ぶらぶらどら息子
四	犬に引かれて歩く飼ひ主	好	敏	二二	エイズ登録知らぬ間に済み
五	新築の月にかがよふ陶瓦	悟	子	二三	楽屋入り恋の疲れを目の縁に
六	栗のおこはに胡麻塩をかけ	健	子	二四	嬉し恥づかし緊縛の秘戯
七	おさげ髪数珠玉に糸通しをり	孝	子	二五	雪催ひ鳥の子紙のしつとりと
八	エリックサティの好きなあの人	遊	枝	二六	水仙匂ふ房州の海
九	抱きつけばピアノ鍵盤パンと鳴る	敏	悟	二七	地響きのダンブ街道父老いて
一〇	おどろおどろの蔵の薄闇	悟	枝	二八	奉納相撲に勝った遠き日
一一	玉虫の厨子に涼しく月さしぬ	枝	悟	二九	お月見の支度出来しと声をかけ
一二	ひらく扇に誰が描きし鯉	遊	敏	三〇	貰ひし猫はまたたびに酔ふ
一三	バザールに客呼ぶ声も秋近く	敏	遊	三一	読みふける恩師校本西鶴忌
一四	名もなき草の伸びる裏庭	遊	敏	三二	かかあ天下で亭主関白
一五	内閣の支持率のやや落ち目なり	枝	敏	三三	とんでんかん鍛冶屋の槌の調子よく
一六	本醸造は生のままで飲む	敏	同	三四	膏葉の痕搔いてのどけし
一七	羽衣を謡ひて帰る花の下	同	敏	三五	山里は花にまぎるる湯のけむり
一八	オール流して休むレガッタ	遊	敏	三六	またたき潤む春の灯火

洋

遊 孝 枝 悟 敏 和 悟 遊 和 悟 子 和 悟 遊 枝 同 悟 枝

四宮の連句会は午后六時開始、同九時閉館である。正味三時間、日頃は二十韻を巻くのに丁度よい。暮の二十五日、今年最後の連句会なので思い切つて歌仙を巻く事になった。捌の他に連衆五人である。途中和子さんは抜けて別席の二十韻に参加、そちらが満尾してから又本席に加わつて下さった。巻き終つて読み返せば当然ぎくしゃくとしている所が多く、何とか付味を整える可く校合を試みた。その過程をここに記してみたい。

起句は互選。イヴだというのに街騒をよそにして連句の座に集つた方々の一致した感慨であらう。

脇、原句 ポインセチアの燃ゆる赫々

一直 ポインセチアの燃ゆる紅

聖夜に対してポインセチアは誠に結構だと思つが、赫々の文字はいかにも硬い。紅(くれなる)の方が起句の風狂人の心にもポインセチアにも優しい。

第三原句 落葉中タクシー乗場列なし

一直 落葉踏むタクシー待ちのしんがり

第三は大きく転じる事が大切だが、やはり読者を頷かせる微かな付心が欲しい。前句の「燃ゆる紅」に対し、列のしんがりで落葉を踏む切ない気分が一直。又起句に「巻いて」とあるので、第三ので止めは具合が悪かつた。

四原句 三匹の犬引いてゆく人

一直 散歩の犬に引かれゆく人

其場の付。四句目として軽く俳味があり結構だが、三匹にこだわらなくてもよいのではないかと、作者と相談して一

直。原句もよかつたと思う。

七原句 数珠玉に糸通しをりおさげ髪

一直 おさげ髪数珠玉に糸通しをり

唯黙々と数珠玉つなぎをしている少女。前句と合わせると初潮を迎えた頃の事とも思える。思春期のもの思う姿を印象付ける為に「おさげ髪」を上五に据えた。

八原句 サティイが好きと話弾んで

一直 サティイが好き少年も好き

治定 エリックサティイの好きなあの

七で折角少女が出たのに、八の原句では恋の気分が薄い。それで一直したが、サティイが流行の音楽家である事を一般に理解させる為には、エリックサティイとフルネームにした方がよい。又数珠玉つなぎの少女の心の中では「少年」より「あの人が素直であらう。ここで「人」の文字を使ったので、表に戻り、

四治定 犬に引かれて歩く飼主

「人」が飼主になり、次の五句目、新築の家に対する付心

がはっきりしたかと思ふ。

十一原句 玉虫の厨子にとどける月涼し

一直 玉虫の厨子に涼しく月さしぬ

「玉」の字、八の数珠玉とは同字だが三句去つているので頂いた。但し月光が「とどく」の表現がやゝ無理なので一直。尚、玉虫は夏の季語だが、玉虫の厨子では夏にならぬ事も一座の話題となつた。

十二原句 煽ぐ団扇は深水の鯉

一直 開く扇に誰が描きし鯉

前句玉虫の厨子の余情に対して「団扇」より「開く扇」の方が付味よく、八でエリックサティーと言う人名が出ているので、深水（伊東）は出さぬ方がよい。又絵の作者が知れぬ方がかえってゆかしいとも言える。

十三原句 サンパンを操る背は汗に濡れ

一直 サンパンを操る背も秋近く

こゝで外国の民俗が出た。サンパンを操るのは水上生活者。前句とは向い付である。但し「汗」は三夏であり、夏三句が続いて皆三夏では曲がないので、「秋近く」(晩夏)と一直。

十八 オール流して休むレガッタ

花の句に付くこと大変結構な折端であったが、うっかり十三の「サンパン」と差合う事に気が付かなかった。十三・

十八のいずれを直すか悩んだが、十三をやはり外国の民俗で

十三再校 シクロこご男の背も秋近く

シクロは戦後の日本にもあった輪タク様の乗物。しかしこの巻は他にも乗物の句が多く、又東南アジア地方に「秋近

く」と言う季節感があるかどうか疑問なので

十三治定 バザールに客呼ぶ声も秋近く

十四原句 貧乏草の伸びし裏庭

一直 名もなき草の伸びる裏庭

十三「バザール」と十五「内閣の支持率」の中に「貧乏」

が入ってはあまりにも転じが無いので一直した。

二一原句 純金の鎖をかけるドラ息子

一直 純金の鎖ぶらぶら息子

先ず折立十九から声を出して読んでみると、「土間に片寄る」。「鎖をかける」が打越にあり、こまかい様だが、舌頭に千回唱えるまでもなく直し度くなるのである。又「ぶらぶら」で、ドラ息子の生態も伺える様に思う。

二二原句 ひそかに進むエイズ登録

二三原句 目の縁の隈を気にして楽屋入

二四原句 人には言へぬ縛り方され

右三句並べて見ると二二「ひそかに」二三「人には言へぬ」これも同意語の打越である。

二二、二直 エイズ登録知らぬ間に済み

ここで問題なのは、原句では一つの社会現象で場の句としてとらえられていたのに、一直した為に前句ドラ息子のその人の付となつてしまい、付味がやゝ粘ったうらみがある。

二三、二直 楽屋入り恋の疲れを目の縁に

原句の「目の縁の隈」で恋の情態を感じさせなくはないのだがここではそれが情事の疲れであると言つてしまい、明るい感じにし度いと思つた。

二四、二直 嬉し恥づかし緊縛の味

治定 嬉し恥づかし緊縛の秘戯

この句は作者から一直を申し出られた。原句の唯異常さを投げ出した様な興味本意の表現より、「嬉し恥づかし」という心理を表現した方が勿論面白く又しおりがあつてよろしいが、捌としては「味」ではなく「秘戯」として置き度い。いずれにしても捌が戸惑うばかりの恋の山場を作られた作者に敬意を表する。更に二五の句、流石にベテランの

付。前句の余情をひたと押さえて見事な恋ばなれである。

二六原句 水仙匂ふ安房の崖ふち

一直 水仙匂ふ房州の海

この日洋子さんは別席であったが房州のお土産に香り高い水仙の束をお持ちになり、一座の皆さんに分けて下さった。和子さんの発案で捌が付けさせて頂いたが「崖」の文字は不要。その方がかえって二七の「ダンプ街道」が引き立つたと思う。

二八原句 相撲取りには辛き番付

一直 奉納相撲に勝った遠き日

この辺で制限時間が気になる。相撲は秋の季語だが、今は一年に六場所もあり、原句のままでは季節感が生きない。丁度神祇の句も出ていなかったし（起句はキリスト教）述べ懐の句としても適当な場所だったので一直した。

二九 お月見の仕度出来しと声をかけ

前句の述懐に対して実に佳い句を出して頂いたが遡って表の月を見ると

五原句 新築の瓦を照らす望の月

となっている。お月見も勿論仲秋の満月。一卷に名月が二つ出るのは差障りあるので

五治定 新築の月にかがよふ陶瓦

三〇原句 貰ひし猫は木天蓼に酔ふ

一直 貰ひし猫はまたたびに酔ふ

三二の「かかあ天下」と「天」の字打越

三四原句 搔きて長閑けき膏葉の痕

一直 膏葉の痕搔いてのどけし

原句はカ行の音が耳に障るので、下七を頭に据え、音便と終止形で調子をやわらげた。

三五原句 墨色の稜線花の雨あがり

治定 山里は花にまぎるる場のけむり

一卷眺めて見てまだ出ていないものは山であった。しかし天象は「油ませ」（これは起句の風狂の「風」に障らぬ様、苦労した佳句である）や「雪催ひ」があるので、わざわざ花の句で雨を降らせる必要はなかった。前句の膏葉にはいささかベタ付だが、右句に治定した。

三六原句 霞を渡る長き鐘の音

治定 またたき潤む春の灯火

三五と同様「霞」は不要だし、「鐘」は三三鍛冶屋のどんてんかんにも障るので右の通りとした。

はじめに述べた様に、この巻は時間の制限があったので、かえって連衆の気分が集中したとも考えられる。捌がぼんやりしていると、新人もベテランも次々に楽しい発想を示して下さるので本当に助かった。殊に名残の裏に至ってはほとんど待つ間の無い程の速さで短冊を出して下さるのだ。又校合に就いては、巻き乍らその場で直した部分もあり、後日考えに考えて直した句もある。鮑目を取るという言葉に従い、随分あちこちに手を加えたが、出来るだけ作者の意図に逆わぬ様、心がけた積りである。そして結構珠が転んでくれたのではないかと思ひ、改めて連衆の皆様感謝している。

蓑虫

付勝練習二十韻

東 明雅

投句締切
4月20日

九句目	バザールに水煙草吸ふ男たち	良子
十句目	すこし疲れて美術館出る	正雄
治定	見上ぐれば摩耶のあたりに雪しまく	鋭太郎
1	見渡せば遠山なみに冬霞	妙子
2	東山静かに眠り京の町	まゆみ
3	枯木立陽の射す広場鳩の群	千雪
4	冬の雨びしよびしよ降つてゐたりけり	信子
5	なだらかな翠黛めぐる鳶の円	千町
6	鷓来るいつもこの場所この時分	美幸
7	鷹ひとつ吹きしぼらるる巖あり	澄子
8	冬晴の煙突煙真直に	典子
9	迎へくる母の免許のま新し	健悟
10	寒林の心なぐさむものもなし	美鈴
11	間近なり冬鶯のこゑしきり	治子
12	南天に通ふ鶉あまたたび	智子
13	またたきの睫毛虹なす寒落暉	達子
14	築山の向ふ道あり玉珊瑚	同
15	一面の枯芝の色麗しき	美和
16	道先へ先へと移る尉鷓	よしえ
17	餌まけばすぐに集まり寒雀	道郎
18	磨かれて貴石減りゆく夕茜	雅代

※句の位に應じているけれども、全体の表現がややおとなしすぎて、打越・前句の気分から十分に転じ得ていないように思う。②もその点似たりよったりである。③は鳥を出して一巻の模様に変化を付けようとする着目はよいが、何か俳句の三段切れに似た表現が気になった。④付味・転じともに不十分である。⑤この句は素晴らしかった。まず翠黛(山の中腹)という語が美術館と位を同じくし、鳶で新しい題材を出し、気分も晴やかで転じが利いている。ただ一巡をなるべく守りたいので断念した。⑥鷓は付味はよいが、時・処いつも同じではマンネリで気分の転じがない。⑦鷹は位があり、表現にも働きがあつてよい。ただ、このようないわば空想上の鷹が、前句の現実にかどうか疑問である。⑧付味・転じ、ともに十分でなく、平凡である。もちろん、平凡な句がよい場所もあるが、ここではすこし変化が欲しかった。⑨「気分を引き上げたい」と思つて付けられたのは賛成である。ただ付味(位)の方がいかであるうか。⑩寒林は位としてはよいが、転じが利いていない。⑪冬鶯は位もよいし、表現も活気があつてよいが、「り」という音の重複が気になった。⑫これはいささか離れすぎで、付味も転じも不十分である。⑬これは位も転じも十分である。ただ強いて言えば、美術館で労れたために隣いても寒落暉が虹のように見えるのだとも解釈できないわけではない。これでは原因・結果になつてまずい。⑭玉珊瑚は位は合っているが、一句の表現が前句に遠すぎるような気がする。⑮一面の枯芝の景は美術館の位に合っている。こんな

19 逆光の水に潜ぎて鳩

謙太郎

20 粉雪のはがるごとく降りしきり

あかり

21 石焼薯車ゆっくり流し居り

徹

22 冬麗の初島しかと小手のうち

うせい

23 池の鴨驚くばかり増えてゐし

雄次郎

今度の付句は、前号に記したように、人情自・場の句であり、雑または冬の句であれば何でもよい。応募された二十余篇の付句は、すべてその条件に叶ったものであり、十七字の中にいろいろの付心が示され、それに従ってさまざまの情景が展開され、読んでおもしろく飽きることがなかった。付味・転じもそれぞれによく考えられており、極端に言えば、どの句を取ってもよいと思われるもので、一つを選ぶのに大変苦労した。

いわば、全部合格であるけれども、その中から一句選び出すには、それ相応の根拠がなければならない。まず、前句は美術館を見た人の疲れであり、打越もバザールに水煙草を吸っている男たちのいわば無気力な生活を写し、この二句には何かダルな気分が通じている。今度の付けは三句目の転じで、この気分から抜け出すことが肝腎であるとともに、付味としては前句の美術館の位に応じたものが欲しい。この二つの条件を完全に満たしているものを私は選びたかった。もちろん、この条件が絶対だとは言わない。これは私の主観的な主張であろう。しかし、すくなくとも、付句選定の条件の一つになることは確かである。

右の条件を参考にして選定してみると、①の冬霞は前

突放したような句もおもしろい。⑩尉鷗が自分の行く先へと翔んで来るのは美しく、可愛い景色で、位もあり、気分の変化、転じも十分である。⑪寒雀はまあまあとして、餌をやればすぐに集って来るというのでは、あまり平凡すぎる。⑫この句はちょっと理解できなかった。貴石とは何か、翡翠みたいなもの、まさかダイヤモンドではあるまい。貴石を磨いているのは工場であらうか。あるいはその工場と前句の美術館を対付的に出されたのであろうか。そう考えると納得でき、おもしろいと思う。⑬美術館を出て上野の不忍池に立った景でもあるか。ただ水という字が打越にあるのはまずい。池・沼いろいろ変えることができよう。⑭「はがるごとく降る」というのは、どのような降り方なのか、珍しい表現でもおもしろいと思ったが、真意は分からなかった。⑮石焼薯では美術館の位にそわない。打越が水煙草であるから、食物を出すなら、もっと気の利いたものを出すべきであらう。⑯この句はすばらしいと思った。冬麗は美術館の位に応えているし、初島という地名も出てよいと思った。しかし、よく考えてみると、この句第三に「海岸線波頭真白に月ありて」という句があり四句目にホバークラフトが出ている。遠輪廻になりかねない。⑰これも不忍池の景であらうが、平凡である。

治定の句、兵庫県立美術館がモデルになっているようだが、摩耶山という山の名もよく美術館の位に叶い、雪しまくも転じが利いているので採用した。次は、人情他の句か場の句。冬は一句で捨てても続けてもよい。

第三十二回 猫 蓑 会

歌仙六卷

参加者三十五名

平成二年一月十七日
於 関口松声閣

初 懷 紙 (雪晴れ)

氏原正雄 捌

花の句について

東 明 雅

雪晴の園かがやかに初懷紙	正雄	鯛網を引く男等の無精ひげ	利 亭	初懷紙(雪晴)の巻
蓬萊盆を飾る床の間	杉亭	疎開暮しのいまだ馴染まぬ	利 亭	
風揚に勇む子の類緊まるらん	雅代	遥かなる産土神に願をかけ	利 亭	
土手のをちこち摘草の群	郁子	東西の壁やっと無くなり	雄 亭	10 ^ウ しゃっくり癖がすこし心配
月こがすまで山焼の炎あげ	治子	防寒の服に構へるレポーター	亭	11 如意輪堂沈み吉野は花万朶
たまの休みをピアノ弾きあゐる	房利	シャム混ベル混可愛がる猫	治	12 枝移りして鶯の声
学者にて茶杓作りのお見事に	郁	八時間の時差もものはかき口説き	利	
結城の外は身につけぬ女	代	白黒黄色恋のお相手	雄	4 ^ナ あかんべえして逃るわんぱく
蔭に寄り口紅のあとそっと拭き	治	故里の古城の趾は荒れしまま	郁	5 散りつづく花片重く水の上
蓑賣の脇に瓶のころがり	亭	ひとり寝の夢銘酒名水	代	6 ぶらんこ鳴って長き夕暮
犬と山羊に吾子の親しむ小旅行	利	テレビ消し縁に出づれば月かかり	利	
アニメブームに乗って儲ける	代	夜更けて高し庭の鈴虫	治	
帰るさの鍵穴に射す望の月	亭	勤勉で実直に過ぎ桐一葉	亭	
街の界限ただに露けく	利	和綴の本を徒に積む	郁	
つくるのも食べるもお好きりたんば	郁	足の蹠叩けば諸病癒ゆるてふ	治	
しゃっくり癖がすこし心配	代	あかんべえして逃るわんぱく	代	
如意輪堂沈み吉野は花万朶	郁	散りつづく花片重く水の上	雄	
枝移りして鶯の声	治	ぶらんこ鳴って長き夕暮	利	花に吉野また吉野に花を付けることには、昔から、いろいろ難しい説がある。花に吉野、吉野に花、どちらにしてもあまり平凡で月並だからである。これらが打越にあるのはなおさら悪い。しかし、一句の中に吉野と花とを詠みこむことは決して嫌わない。枝折の花が満開であるのに対して、匂い

初懐紙 (林泉の)

下坂元子 捌

初懐紙 (林泉の) の巻

の花は落花を詠んで変化をはかれたのは流石である。ただ、もう一步、両句の気分の変化も考えられたら最高だったと思うが、これは望蜀のことかも知れない。

林泉の雪かがやかに初懐紙

元子

ばくばくと婆と畑打つ午下り

良

小鴨黒鴨群れてゐる水

麻子

のぼれば軋む納屋の階段

司

クレソンを添へし洋皿運ばれて

良子

銃声のアゼルバイジャン風さわぎ

麻

受験子の吹く陶のオカリナ

よしえ

手術中なるランブ赤赤

聖

天窓にぼっかりにじむ臘月

徒司

冬眠の蠶を売る町の市

麻

柱時計のねぢ固く巻く

聖子

単身赴任ひたる柚子風呂

良

安永の織機守る嫁女在り

え

いい人といはれることにくたびれて

聖

外出好きの亭主美丈夫

麻

苛めてみたいあのお嬢様

麻

助手席の君の沈黙測りかね

良

「宮」に似し後姿の高島田

司

岬には大波小波打ちくだけ

麻

恋のてだれのタブー忘れる

元

囃台叩き符牒飛び交ふ

良

月高く阿蘇のカルデラ列車行く

良

月に笑むお地藏様に掌を合はせ

司

草の露払ひ祈りし屋敷神

司

金粉漉きし紙に栗飯

司

忘れ缺が錆びてみつかる

聖

雌猫のモンローウォーク秋の庭

良

オグリキヤップ観覧席のどよめきて

良

拗ねた唇ねだるお手当

司

二つ三つ四つ淡き雲浮く

麻

花の陰鬼面の人は誰ならむ

麻

去年の道たがへ逢ひたる花大樹

元

先へ先へと蝶の舞ひ立つ

え

網で掬へる乗込の鮎

え

枝折の花の句は大変付けにくかったろうと思う。それは花前が恋句になっているからである。打越が「雌猫のモンローウォーク秋の庭」だが、この面には既に恋句が出ていることから、次の花前の句は恋句にしない方がよかつたのではないかと思う。句の花、おだやかで結構である。ただ慾を言えば、この花大樹にめぐりあった感激が、もすこし、キラキラとしたものとして表現されたらと思う。

- 4 二つ三つ四つ淡き雲浮く
- 5 去年の道たがへ逢ひたる花大樹
- 6 網で掬へる乗込の鮎

雪晴れ

中川 哲捌

雪晴れの巻

雪晴れの松声閑やしづもりぬ

寒雀来てくぐる灯籠

魴鯉の背鰭を立てて塗り腕に

大役こなしはっと一息

月まどかフルートの音のいづこより

鮑振りつつ帰る夜字士

団栗を入れてふくらむ文かはゆい

俺が惚れたよ嫁にどうだい

酔眼はもうろうとして迷ふのみ

ベイブリッヂに車渋滞

クルーザー魔除の札の貼られあり

株の上下は総選挙待ち

甚平で月見る人の反戦論

厠の窓に青き山々

鳥の子紙あくまで薄く漉き了へぬ

使ひ勝手のよき急須注ぐ

夢色に花片の舞ひ且狂ひ

パビリオン出るひとに陽炎

哲

孝子

和子

昌子

藍

ふみ

藍

和

昌

和

孝

み

昌

孝

藍

和

同

藍

潮騒の中ひたひたと遍路来る

まじまじ我を見やる野良犬

義理の仲僅かな土地を唾みあひ

そっと差出す板角煎餅

五十前ゲートボールに入りたし

友情慕情恋情の道

女房も妾も倦きて女子大生

ニースで灼いた胸も豊かに

砕かれて砂にまじりし骨白く

「やっこ俳諧」若き桃青

たむろして文字賞を居待月

母系さやかに守る料亭

かまどうまいきなり跳べる靴の先

お巡りさんの訛やさしき

漢方の薬屋で買ふにきびどめ

雨のくるらし風の春めく

花万朵舞台開きの三番叟

打つ大鼓に亀も鳴くなり

孝

み

孝

昌

み

藍

孝

同

藍

和

み

孝

昌

孝

昌

和

哲

み

10^ウ 使ひ勝手のよき急須注ぐ

11 夢色に花片の舞ひ且狂ひ

12 パビリオン出るひとに陽炎

4^ウ 雨のくるらし風の春めく

5 花万朵舞台開きの三番叟

6 打つ大鼓に亀も鳴くなり

花前の句「使ひ勝手のよき急須注ぐ」本
当に軽くておもしろい上々の花前、それに
対して、「夢色に……」という枝折の花、
これも常套を脱した珍しい花の句で結構で
あった。

匂いの花は、またがらりと変わった素晴
らしい花の句である。但し、花前の句「春
めく」というのは初春の語であるが、「花
万朵」とは付味がよくないと思う。

初懷紙 (四温晴れ)

東 明雅 捌

初懷紙 (四温晴れ) の巻

初懷紙上々吉の四温晴れ

寒紅梅のふりこぼす雪

浅鯛舟ゆらりと棧に竿ついで

より道をして入学の子ら

アーケード臘月夜に酔ひしまま

電卓うってつける家計簿

大鍋の蓋ぐつぐつと庫裡の隅

何とはなしの嫁きそびれなり

惚れこんだ人にはいつも妻がゐる

カリオン時計ひびく街角

脳外科は扉閉ざして夏の日

菖蒲浮かべて宿直の風呂

一向にうだつあがらぬ敵役

たれ目の猫がベッド独占

ネクタイは水玉模様ばかり締め

女性上位の芥川賞

花の宴大吟醸の菰冠り

行くも帰るも陽炎の中

明雅

正江

瑞枝

好敏

弘子

枝

江

枝

弘

敏

江

枝

江

敏

弘

敏

同

弘

北海の岬に海馬の吠ゆるらん

身辺整理できぬ子ばなれ

エアロビクス太極拳に真向法

刈安刈りが染むるハンカチ

深川の祭真赤な月登る

あんばん買へば雁渡るなり

木の実独楽廻せば夢の廻り出す

森番の腫の秋乾くころ

縛るならもつと本気で縛ってよ

鍵をカチンとまっくらな闇

寒雷の遠くなりゆきそれっきり

半世紀住みすが洩りの家

われよりも先に女房がぼけにける

今日も一日笑ひつづけて

点心の弁当残る香の物

入歯ゆるみし余寒なりけり

少年が脱ぐ花篝り翁面

蛇のまつはる山路たのしや

枝

江

同

敏

雅

枝

弘

江

敏

時彦

弘

雅

彦

弘

雅

彦

雅

彦

10^ウ 女性上位の芥川賞

11 花の宴大吟醸の菰冠り

12 行くも帰るも陽炎の中

4^ウ 入歯ゆるみし余寒なりけり

5 少年が脱ぐ花篝り翁面

6 蛇のまつはる山路たのしや

枝折の花は豪勢で景気よく、これぞ花の句というもので結構である。また、前句の芥川賞にもよく付いて、祝賀会の様子が自ら読者の目にかぶ。

句の花は、岐阜県根尾の淡墨桜を見に行つた時の薪能の実景である。前句に、連衆の一人草間先生が、初春の季語で付けられた。私の花の句は、余寒という初春の季語によつて引き立てられている。私は初春にはとられないが、花前の句は平易であつて、しかも次の花の句を引き立たせるような句を意識して作るべきだと思ふ。

初懷紙 (雪吊り)

福井隆秀 捌

初懷紙 (雪吊り) の巻

雪吊りの松おもしろや初懷紙

隆秀

百千鳥誘ふ深山に踏み迷ひ

風

10 掃いて清めし路地のしづかに
花トンネル先にぼっかり海の紺

福茶いただきにぎはへる席

千町

売りにだされし重文の軸

子

12 緑の牧に跳ねし若駒

東風すこし池の面に波立ちて

彬風

ループルで学芸員として勤め

子

土やはらかに啓蟄の虫

久美子

アイネクライネナハトムジーク

世

4 試験終りてほっとする今日

バラライカ爪びく窓辺臘月

啓世

絨緞に消えないしみがいすの下

子

5 廿一世紀に生きん花万朶

隠れん坊でまはる母の背

町

足袋を脱がして指へ口づけ

町

6 小川さざめき春をことほぐ

主婦業もこなし流行作家なる

子

ちよっと見は可愛い子ちゃんて凄いのよ

子

藤十郎の真似をせし恋

秀

時計でかくす心中の疵

町

この巻の花の句、二つとも文句の付け様
なし。枝折の花は鮮かな場の句、匂いの花

息づまるたまの逢瀬に抱かれて

世

網棚に緋り採まるる通勤に

風

は新しい時代を迎える決意を述べて人情目
のはつきりした句、二句の間に変化がつけ

冷酒をコップでぐいとひと呑みに

町

関西極道またもドンパチ

子

られて、それぞれにおもしろく結構である。

株の上げ下げ一喜一憂

子

月ほがら街の屋根屋根照らしめて

世

花前の句も、枝折の花の方は場の句めい

稲妻のとどろとどろと響もせる

風

御朱印帳袍に入れてそぞろ寒

子

た人情目の句であり、匂いの花の方も人情

月詠の宮祀る神主

町

夢ばかり追ひすでに還曆

町

自(打越の還曆の句は他のアシライと見る

風炉名残水屋にひとの気配して

世

ビーバーの土木工事はダム修理

世

それぞれに軽く、自然とよい花の句を導き

掃いて清めし路地のしづかに

風

試験終りてほっとする今日

風

出している。

花トンネル先にぼっかり海の紺

町

廿一世紀に生きん花万朶

秀

緑の牧に跳ねし若駒

世

小川さざめき春をことほぐ

世

初懐紙 (白鷺も)

山崎一恵捌

初懐紙 (白鷺も) の巻

白鷺も訪ぬる池や初懐紙	一恵	相統 ^す のリストここまで亀の鳴く	貞	散らかる図鑑隅に片よす
遠く聞こゆる万歳の声	淳子	名刺差し出す特搜の男	悟	10 ⁷
受験の子休む暇なく学ぶらん	千雪	東欧の世界の耳目集めたる	遊	11 通り抜け花の盛りを連れだちて
いつも手元に好きなオレンジ	遊	ザルツブルグは塔多き町	雪	12 母の作りし摘草の籠
夕月に淡く翳りし雛の頬	貞子	小春日の真下に仰ぐ飛行船	淳	4 ⁷
自転車の後ついてゆく犬	健悟	畑打ちある裘 ^{はらもと} の爺	淳	5 かねもす届く春の潮騒
煙草の輪うまく続けて吹いて見せ	淳	ひっそりと座敷わらしの覗き居り	貞	6 弥生の茶席会釈其処此処
唐棧粹に着流せし人	遊	ふっと消えたる銀の燭台	同	
だまされてみたいきらきらした嘘に	貞	枕辺の夫のあぶな絵恥づかし	悟	枝折の花、おもしろいのであるが、花前の句がはつきり内の句であるから、ちよつと付味がいかがであるうか。「通り抜け花の盛りを抜けて来て」ぐらいにされたいかがかと思ふ。
氷菓舐めつつ待てる街角	雪	恋患ひに効くレシビ欲し	遊	
パチンコ屋冷房のよく効いてをり	遊	公達の薫物合はせ月匂ふ	同	
マイホーム買ひワゲンを買ひ	貞	薦の新酒が土間に並びて	悟	
残業の果てて傾く月の路地	悟	秋祭しんこ細工のなつかしや	淳	匂いの花、これはまたすばらしい花の句である。前句もいかにも和歌山県を思わせるような句で、それとの付味もびつたりである。今度の猫蓑会での花の句の秀逸である。
盆綱引は山側の勝	淳	幼きころのお習字の反故	同	
蟪蛄の鎌立てきれず擱まりぬ	雪	カルチャーもアクセサリーのひとつとか	貞	
散らかる図鑑隅に片よす	悟	ひねもす届く春の潮騒	遊	
通り抜け花の盛りを連れだちて	恵	紀子様 ^{きこ} 様に優しくかかる花の雨	雪	
母の作りし摘草の籠	遊	弥生の茶席会釈其処此処	雪	

◇逗子連句会

歌仙二卷

平成二年一月十九日
於 鎌倉新田中

四温の雨

東 明雅 捌・文

湘南は四温の雨や初懐紙

水仙の咲く庭の片隅

凧揚げの児等の喚声ひびきゐて

入学試験今日終りたり

剪定を待つ記念樹に月かかる

会食のあとするコーヒー

涼風を胸一ぱいに吸ひこんで

うなじの白き素袷の女

剃り跡の青きが自慢男前

回覧板を持って隣へ

危げなベレストロイカどこへ行く

崩れし壁にすだく馬追

掃苔の手元を照らす月明り

宅配便で舞茸が来る

ぞろぞろと小猫小猫猫屋敷

瓶のアルミ貨神棚にあげ

酔醒めの身は恍惚と花の頃

茶揉み仲間は休む暇なく

明雅

満子

杉亭

多恵子

知佐

八重子

弘次

満

亭

八

多

亭

雅

次

八

亭

次

佐

鐘霞む空と海とが溶け合って

まんぼうの如飛行船来る

夢に見るアルルの町は絵のやうに

ヴァイオリン弾き赤い羽根つけ

筋違に月のさし込む奥座敷

ろくろっ首と寝ればうそ寒

嫂と一線越えて追ひ出され

パンチラスコート見れば目の毒

朝シャンを真似て親爺は風邪をひき

羅漢の中に己が姿を

いばがへるふまれてのそり峠道

清流よぎる翡翠の艶

頼朝の昔おもひてたどりゆく

瓦煎餅お土産に買ひ

名物は婆の笑顔で繁昌し

乗込鮎の便りつきつき

遠筑波鹿島香取は花吹雪

雛人形を飾る家々

多

八

多

八

亭

雅

満

次

亭

次

満

佐

八

佐

同

亭

雅

多

一月十九日、湘南連句会の方々のお招きを受けて、鎌倉へ行く。同行は式田・杉江・中川・豊田の四氏と家内、例によって車中吟、あつという間に十一時半、鎌倉に着く。途中の風景など見る暇もあらばこそ、鎌倉は暖かい四温の雨、早速、料亭新田中に案内され、連衆十四人、二卓の席を興行した。

私の席は、杉亭さん・弘次さん・知佐さんの外は、満子さん・多恵子さん・八重子さんすべて初顔の方々だったので、一巡すますのに時間もかかり、大変だったが、裏の後半あたりから、だんだん新人の方々も要領が分かり、次々に短冊を出して下さったのは嬉しかった。名残の表になって、ろくろっ首と寝ればうそ寒

嫂と一線越えて追ひ出され

パンチラスコート見れば目の毒

朝シャンを真似て親爺は風邪をひき

などの恋句に大笑いが絶えない賑やかな

一座となった。四時半満尾。披講をすませ

て駅に来た時は漸く暗くなっていた。

初懐紙

本屋良子 捌・文

湘南は四温の雨や初懐紙

柳結びし床に蓬萊

風上ぐる親子の姿広き野に

鶯笛を小さく鳴らしぬ

臘月新開の街しづもりて

置きはなたれしバイク自転車

放列のカメラ横切る練供養

浴衣を粋に抜いた衿足

喧嘩好きそれを承知の深い仲

酒呑童子の生れ変りよ

一日に一善石橋叩きます

風の和らぎ残る朝月

爽かにサンチョパンサの像の前

溢れ蚊払ふ白馬を牽き

宮様の御用調度は御下命で

葉巻葺の煙輪になる

対岸の灯台仰ぐ花吹雪

よなぼこりして駅伝の行く

明雅

良子

郁子

和子

哲

好敏

志

道

道子

哲

志

和

郁

哲

和

道

郁

敏

蚕オさかりの村は総出の忙しき

探し物してその名忘れる

転校の土地の訛の気になりて

お巡りさんの靴は防寒

ジャンと鳴り火事は何処だとサツと出る

きしむベットに野暮な呼鈴

尼寺に早や勤行の刻の来て

入歯もぐもぐ鮎食ふ婆

水泡ののらくろ漫画なつかしく

赤まんま散るままごとの真塵

月の宴折敷八寸向付

夜寒身に入む株安の報

運ち試し終天神賑はへる

昔馴染みと三つ玉を撞き

浅草の電気ブランはレトロ調

緑の日あり黄金週間

見上ぐれば峠の茶屋は花万朵

友と訪ねし旅のうららか

道

和

敏

同

志

哲

和

郁

志

道

哲

郁

敏

志

和

良

郁

敏

私達湘南連句会も返子に産声をあげて四年近くになり、少しずつ新人も増え、新年には東先生御夫妻をお迎えして歌仙を巻くことになった。いつもの会場のお産女さまを通り過ぎ、鎌倉名物・青果市場の中を通って会場にご案内する。先生のお話に「伊勢派は、芭蕉―北枝―希因―蘭更―蒼虬―芹舎―凌冬―芦丈―明雅と続きあなた方は十代目です」とあり、三百年の間脈々と語り、教え継がれてきた伊勢派連句を先生より直接伝授されているのだという実感をひしひしと感じた。さらにどんな連句が良い作品かと続けられ、芦丈師の言葉をかき取り「珠が転んで粒があり、哀れ・しおり・俳味があれば上等」と結ばれた。連句を始めるに当って良いお話であった。実作は果たして珠が転ぶようにいったらうか。

喧嘩好きそれを承知の深い仲
酒呑童子の生れ変りよ
一日に一善石橋叩きます

風の和らぎ残る朝月
爽かにサンチョパンサの像の前
このあたり、とても良いと一人悦に入っているのだが、いかがでしょうか。

◇渋谷連句会

歌仙三卷

平成二年一月十五日
於 白金台マンション

小豆粥

東 明雅 捌・文

添ひ添ひて半世紀なり小豆粥

明雅

次々にマルクスの夢破れつつ

文

袖重たげな初釜の客

幾子

幼の類に返るほほゑみ

和

坪庭に朧々の月さして

和子

おみそでも入れて貰へる雪まろげ

同

耳を澄ませば仔猫鳴く声

文夫

猿といっしょに浸る温泉

隆

大掃除終りてはづすたすぎがけ

隆夫

セクハラも今は昔の話にて

文

ベストセラーは平積みになされ

隆一

花むこ学校恋の手ほどき

凡

ミニシアタ銀幕の星蘇り

凡

剃りすてる胸毛すねの毛すっぱりと

和

3LDKお妃が待つ

文

滝に打たるる行者荒行

幾

ほんのりと酔うて素馨の匂ふ闇

和

大霊界気になりはじめ四十過

一

洗濯物に蟬のぬけがら

凡

菊人形に偲ぶ亡き人

隆

如意宝珠長谷寺は今秋うらら

幾

UFOの行方はいづこ月の夜

幾

昼の月見てそぞろ歩きす

一

豊年万作ジャズで編曲

和

松並木漢詩朗詠さはやかに

隆

白金に一期一会の歌仙巻き

幾

初物食うて白寿なる翁

和

利休鼠の藍餅着る

隆

クレープにピザにリゾットまたムース

同

土手の上バイク馳らせまっしぐら

一

鶯雲雀 雉に山鳥

幾

投ぐるボールの描く曲線

文

花の下翔ぶが如くにぼっけもん

文

八重桜降るだけ降ってあがる雨

雅

歌舞伎町にもひそむ春愁

一

椿山荘に蝶の舞ひ立つ

凡

渋谷連句会の初懐紙が一月十五日の小正月、目黒白金台のマンションで興行された。今年には四宮連句会、そして新しく生まれた卯の花連句会も一緒になったので、総勢十九名の賑々しさ。

その中で、私の一座は、和子さんと凡さんがお馴染で、あとは全く初対面、しかもその皆さんが連句はせいぜい二三回の経験しかない方だったので、如何かとひそかに案じたが、ベテラン和子さんの好リードで自ら気分もほぐれ、予定の時間内で歌仙一卷首尾したのは、まことに嬉しく、また楽しい一日であった。

ナオの後半
セクハラも今は昔の話にて
花むこ学校恋の手ほどき
剃りすてる胸毛すねの毛すっぱりと
滝に打たるる行者荒行

大霊界気になりはじめ四十過
あたりが一卷のヤマであるうが、花むこが出たため、匂の花は八重桜になってしまった。

小正月

大窪瑞枝捌・文

白金やベントツを磨く小正月

瑞枝チ 畦塗の男に憑きしそぞろ神

成人式に集ふ振袖

孝子

赤提灯の地酒辛口

孝

寒厨きざむ干菜のこまやかに

好敏

総選挙山が動くか兜町

美

うつらうつらと日だまりの猫

えい

ハラスメントでちぢむ新入り

敏

十六夜のシンセイサイザー澄み透る

美奈子

禿ちやびん小遣やうて甘やかし

敏

あと先になり帰る芦刈

亀

横恋慕する生さぬ仲なれ

孝

待ち兼ねし猫の解禁誘ひ合ひ

敏

幻と見しは雪虫消えやすく

同

びたと履きたるジーンズの尻

孝

ガウンはだけしバルザック像

敏

予備校のアイドルにこと微笑んで

美

望郷の虜囚に点呼のろのろと

枝

新聞雑誌駅の屑籠

い

古稀を迎へて学ぶ楽しさ

い

土地の値の急上昇が罪作り

孝

三日月の金星食を仰ぐ街

敏

夏断ちの僧のおわす物陰

敏

爽やかに行くピザの配達

孝

鰻割く手もと鮮か昼の月

孝

冬用意ミシンの調子なめらかに

亀

およしなさいよこんな時間に

孝

お湯に振り込む温泉の粉

い

マンションは上下左右に音響き

い

村おこし陶工家族ぐるみ来て

美

出稼ぎ外人まとめ買ひする

美

九官鳥の語るいろいろ

美

花冷えの居ずまび直す茶の稽古

い

吉利支丹殉教の碑に花閑か

枝

春の鼻風邪くしゃみこらへて

敏

まつ毛にとまる清明の雨

美

「捌きはつらいよ」あのおばさん、山姥
みたいにかにかと寄って来たけど、ひょ
っとしてこの捌きじゃないだろか。案の
定、小短冊などひらひらさせて、さあお立
ち合ひ、つけたりつけたり。と言はれたっ
て第三、月の座、VIPの座。犬猫の座も
あるにはあったが、取り損なって、まだか
一巡、酒が飲めぬとぼやかれる。案外駄目
ねこの子達、といふあの目付き。

でもこの船どっちへ行くのかな。ヒント
するのが船長の仕事、舵なし船では水夫は
働き様がない。若いセンスに期待しますわ、
なんちゃって。「ねえ、ヘビメタって何の
こと。知らないわ。こういふ一過性の流行
語って問題じゃない」やっぱりそういふ事
なんだ。編だ、輪廻だ、打越した。定石通
りはつまらないけど、安全プレイは安全だ。
自他場、爺婆、往きつ戻りつするうちに、
員数調整も大仕事。何でもいいから、とは
失礼だが、出して出して、頭の芯までし
びれ果て、単語をばいと書くばかり。腕っ
こきの捌きならまとめてくれよ五七五。本
当に決断遅くって、半端な捌きにゃ参った
よ。

「捌きはつらいよ。」

小正月

下坂元子 捌・文

坂多き街の陽の香や小正月

晴着の児等の頬に初東風

形良く鶯餅を塗皿に

玻璃戸越しなる庭の連翹

朧夜におもごし似たり親子づれ

電車の音の遠く聞こえて

コンパクト維納土産のプチボワン

デイスコダンスで知り合ひし人

朝焼けの酔ひのまにまに解きし帯

厨の隅に小さき蛇

祭禰宜馬上に朱傘さされつつ

懐勘定案に相違し

接待のゴルフ三昧昼の月

一面の早稲はるか山脈

うそ寒の地震に箆笥の鏝の鳴り

翁媪の夢の縁側

花浴びて仏足石の潦

修学旅行鳥つるむなか

元子

健悟

遊

哲

朋子

遊

同

悟

恭子

哲

遊

哲

悟

朋

悟

恭

遊

悟

井にたんと盛りれし蜆飯ナギ

ピレネー犬とうたた寝をする

ベルリンの壁直輸入マルク建て

大棧橋に船の影無く

糶符丁鉈飛ぶ如く飛び交ひぬ

義足の亭主はける標

雪女郎物言ひたげに軒の下

シネマ見ながらボルテージあげ

嘘なんてもうつけない初恋の闇

書き直したる履歴書の嵩

ちちろ虫まんまる月にすだきをり

秋の明荷に母の写絵

ハロイーン女子高校の騒ぎ唄うた

鳶のびっしりからまりし塀

届きたる釣竿ひとつ振ってみる

碁盤の白の打たれないまま

玉堂の里深くして花埋み

さらさらとゆく溪の春水

哲

朋

哲

遊

同

悟

哲

恭

朋

悟

朋

遊

哲

遊

悟

哲

元

明雅

「小正月」何といふ懐かしい響であろう。今や成人の日といふ名の方が馴染んでいったこの日、私の子供の頃はたしかお餅の入った小豆粥を食べさせられたものだった。変らぬものは新しい年を迎えた街に溢れる冬の日射しと、ぬくといふその香。今日といふ日にびたりとついた健悟さんの脇を頂いてゆっくりと表六句は始まった。一座はベテランのお二方に新人お三方、そこへ歌仙捌は初めてといふ私が、哲さん遊さんがついていて下さるから安心とばかり依頼心の強い悪い癖を發揮。ところが新年の乾盃が済むや、新人お三方が若々しい感性と思ひがけぬ表現で次々と出句なさり、要所要所をベテランが引緊めて下さる。何時の間にか座の楽しさにとっぷりと浸りきって遊ばせて頂いている中に、匂いの花に行き着いて了って記念すべき私の歌仙初捌は無事に終った。お助け下さった連衆の皆様、本当に有難うございました。

それにつけても日本語の美しい懐かしい言葉が次第に現代に通用しなくなっているのは何とも淋しい。これらを後に引継いで行くのも微力ながら私達の役目の一つであろう。

◇興流連句会

二十韻 朔風

膝送り

興流連句二十韻の一年

馬場 彬風

朔風に枝張る標鳥の群れ

草舎

山が動くとか、誰かの甲高い声も聞いたが、それよりも地球上が歴史的地滑りを起したような去年(こそ)の歳末、その砂埃も収まらず、新たな視野も開けぬまま、今年が明けようとしている。此の巻の時事句は去年の納会の前日に起ったルーマニアの事件であった。連衆の誰もそのわずか数日後のかの大統領夫妻の運命など知る由もなかった。そう言えば十一月にはベルリンの壁の崩壊、五月には天安門に坐る若者が詠まれていた。

手を懐に仰ぐ大空

閑堂

「暗き朝七草粥も冷むるまま」と、草舎氏の昭和終焉の発句に初まり、二月の甲問外交、六月の参院選、十月のパチンコ議会等、内政の時事、腐敗もその都度詠まれた。

頼まれし仕事の重さ身にしみて

竹無齊

連衆は御案内のような超熟年の六名、場所が東京駅八重洲口を出て、直ぐ右側に並ぶ興銀東京支店の六階、都心を見おろす談話室、正午頃から集って、仕出しの弁当を頂き、豊富な話題に寛ぎ、一時から連句を始めるのが例であり、四時には満尾する。

暮秋の市に人を迎ふる

桜丘

以前には歌仙でなければ物足りないと言う気分があったが、この一年は全く二十韻

洛の寺名残の月の晴れ渡り

彬風

に定着してしまつた。年齢のせい時間のせいだけではないらしい。二十韻が歌仙の単なる略式ではないと、一同が何となく納得するようになったのであろう。それも時勢であるとは自分では考へる。

川の瀬のおと遠く流るる

果然

中世百韻の堂上や地下(ちげ)の連歌の連衆、又元禄泰平の俳諧歌仙の連衆とも違つこの五年余知らず識らず五十数巻をまいてる中に特にこの一年、この二十韻と言

類に触れくる長き黒髪

堂

う形式に自然に落居したのだと思われる。情報化、国際化、ストックインフレ等々、

短夜を旅寝の宿の窓明り

丘

ゆとりを求めてゆとりのない時勢である。価値観も多様化し、当然の如くに短い連句形式もいろいろ工夫された。然し幸運なこ

遥か彼方に聞こゆ雷鳴

齊

とには此処に二十韻があつた。

東欧にペレストロイカ嵐荒れ

然

さすが不易の道統を実作で研鑽された東先生の創案である。伝統と断絶することなく、肝要な式目、特に序破急の韻律をそのまま残しての二十韻、それだけに輪廻停滞も直ぐ目に付く、調子に乗つた馬鹿騒ぎも

デモ鎮圧の軍が発砲

風

あまり出来ない。然しそこにこそ、この当今に心を交わす、きびしい安らぎがあるのかも知れない。

火の種の燃えていつしか炎あげ

堂

恋の病が魅むしばむ

齊

オセンチな乙女に月の影冴ゆる

丘

昔も今も雪の故郷

然

海猫の声に埋まりて酒を酌む

風

膳に著つく眼張るる皿

舎

吟行に友と連れだつ花疲れ

齊

野山うららに暮るるひととき

丘

平成元年十二月十九日

於 興流会談話室

◇柏連句会

檀の実 久保田庸子捌・文

初めての捌の席や檀の実

遠く近くに鶉の声

城山の天守夕月かかりゐて

土産に買ひし瓦せんべい

機嫌よく嬰の笑ひて宮参り

豊かな胸へ重ねたる衿

青林檎手に持つイヴに誘はるる

S字にくねり川渡る蛇

転動は単身赴任地の果てに

天井の染見つつ酒飲む

狸汁ぐらぐら滾る鍋の中

大きくしゃみする婆さまの月

フロンガス地球の次第に住み辛く

金の縁取りミラノファッション

逆玉を狙ってばかりいる男

おさはり課長あれは鬘よ

聞かざるに見ざる言はざる五十年

西行の忌にひびく鐘の音

押花のはらりこぼるる花便り

道忘れたりふるさとの春

平成元年十月八日

於 光ヶ丘近隣センター

明雅 千町 美津 達子 庸子 町 雅 達 津 同 町 雅 津 達 町 雅 津 庸 同 町 雅 津 庸 津

柏連句会に、入会させて頂き明雅先生の

御指導を仰ぐようになりまして、連句の世界の奥深さを、少しだけ判りかけて来ましたが、捌きをすることは、十年位先のことと呑気に構え、先輩の皆様にごえて参りました所、今日初捌きをというお達しで本当に慌ててしまいました。「大丈夫、付いて上げますから。」という先生のお言葉に力を得て、「盲蛇に怖じず」の癖強い私は居直ってしまいましたが、まるで大迷路の入口に立ったような気持です。

私のために作って下さった先生の発句を頂きます。「しっかり」と励ましの「鶉の声」が聞えて参りました。「城山の夕月」「瓦せんべい」と順調です。

ウラに入り、上品なお色気で千町様が付けられ、第七は蠱惑的な「青林檎のイヴ」が登場し、展開が楽しみです。「いいぞ」と自己暗示をしっかりかけます。

ナオは、「狸汁」を飲み「大きくしゃみする婆様」では一同笑い転げます。緩急自在な千町様です。美津様の「逆玉を狙う男」は新造語を取り入れて下さいました。達子様の「おさはり課長」は今話題のセク、ハラもので、鬘をかぶっているそうです。又

々笑いの渦が起ります。

大分賑わったところで、沁々述懐して下さる先生。途端に気が引縮ってまいりませぬ。後は静かに巻き上ることが出来ました。思ったよりも楽しく捌くことが出来たのは、ひとえに先生の懇切な御指導と、気分を楽にして下さる御心遣いの賜で、厚く御礼申し上げます。未熟な私にお付合い頂いた連衆のみな様、有難うございました。

☆新刊紹介☆

平井照敏編 河出書房新社

新歳時記 全五巻

春の部(六八〇円)

夏の部(九八〇円)

秋の部(七八〇円)

冬の部(八八〇円)

新年の部(七八〇円)

これまでの歳時記を参照しながら、多数の季語を収録し、綿密な解説を加え、さらに全季語の(本意)を探究した、本格的な、かつ特色のある歳時記であり、実作に、また辞典・事典としても大いに益する本である。

連句会案内

＊連句教室

日時 第一日曜日 午後一時～五時
会場 関口芭蕉庵
文京区関口二ノ一ノ三
(電) 九四一―一四四五

＊柏連句会

日時 第二日曜日 午後一時～五時
会場 光ヶ丘近隣センター
(南柏駅よりバス 光ヶ丘団地
マーケット下車)

＊A・C・C連句・理論と実作

日時 第二・四水曜 午後一時～三時
会場 新宿住友ビル四十八階
朝日カルチャーセンター
(電) 三四四―一九四一(代表)

＊猫養会(会員制) 年四回

(一月・四月・七月・十月 第三水曜日)
会場 松声閣
文京区新江戸川公園内
(電) 九四一―九六四九

△御注意▽

柏連句会は、従来第三日曜に舉行していましたが、昨年六月から第二日曜に変更致しました。(八月は休み)

雁帛往來

▽一月七日 関口連句教室、連衆十六名
二席に分かれ初懷紙、五時すぎ満尾。二次
会の常席金城庵に行き、八時に帰宅。

▽一月十日 A・C・C 芭蕉の俳諧に
ついて講義、終ってニュー・トーキョウで
二次会。七時半、新小岩の家に帰る。

▽一月十四日 柏連句会、連衆十五名、
新しく加わった人が四名、三席で初懷紙二
十韻首尾。喜楽庵で二次会、六時に帰宅。

▽一月十五日 四宮・渋谷・卯の花、三
連句会の合同初懷紙を白金台のマンション
で舉行。連衆十九名、三席に分かれ歌仙三
巻首尾、目黒の駅でビールを飲み、八時半
ごろ帰宅。

▽一月十七日 猫養会初懷紙、新江戸川
公園松声閣で舉行、はじめに武翁賞が大窪
瑞枝さんに、また佳作賞が矢崎藍さん・八
木聖子さんに授与された。連衆三十五名、
歌仙六巻首尾。金城庵で二次会、九時半帰
宅。

▽一月十九日 湘南連句会初懷紙、鎌倉
新田中で舉行、連衆十四名、歌仙二巻首尾。

▽一月二十四日 A・C・C 蕪村の俳
諧について講義、ニュー・トーキョーで二
次会。

▽一月二十五日 亀戸天神に参詣、木村
恒雄氏に会い、四月の奉納正式俳諧の日取
りなど相談する。

▽一月二十九日 東京会館の角川書店主
催、短歌俳句新年会に出席。

▽一月三十日 別所真紀子「芭蕉にひら
かれた俳諧の女性史」出版記念会出席。ア
ルカイディア市ヶ谷、百十余名参集の盛会。

季刊「連句」第二十八号

平成二年三月一日発行

編集人 東 明 雅
発行人

季刊「連句」発行所

▽277 柏市つくしが丘一ノ二ノ二 東方

電話 ○四七一(七五)一一九二

振替口座 東京七一五二二三三

印刷所 株式会社 岩田印刷

▽277 千葉県 柏市酒井根六二六一

電話 ○四七一(七四)〇一八三

定価 一部 五〇〇円 送共
一年 二〇〇〇円 送共

連句辞典

東 明雅・杉内徒司・大畑健治編

B 6判

三五二頁
三五〇〇円

連句の実作・鑑賞・研究に
必須の知識をすべて網羅！
初心者から研究者まで使え
る本邦初の連句辞典

本書は、用語篇、人名篇から成る。用語篇は、現在使われている用語を中心に三三四語選び、意味・用法の解説をし、「参考」欄の引用文は中・近世の諸資料から、用語がどのように記されているかを抄録。人名篇は、近代以降に活用した連句人、俳人五十四人を選び、項目末尾に代表的な連句作品を収録した。また、連句入門の手引き、連句概説、連句略史を付した。近代連句の状況を知る上で貴重なものである。

収録項目例

＜用語篇＞ 挙句 会釈 一座一句 有心 打越
思いなし 表八句 懐紙 歌仙 軽み 切字
景気 五句目 差合 去 式目 四春八木
＜人名篇＞ 天野雨山 伊藤松宇 上田聴秋
鶴沢四丁 小林見外 下平可都三 関為山
高橋玄一郎 高浜虚子 中村俊定 野村牛耳

東京堂出版

101東京都千代田区神田錦町3-7

電話03-233-3741~2

第5回国民文化祭・愛媛90文芸大会連句部門募集案内

作品

連句形体「半歌仙」。未発表作品(厳守)とし、同一座につき三巻まで応募できる。(花の座を含む春の句三句、総じて四季を詠う。脇起は不可)

応募料

一卷二、〇〇〇円(郵便小為替を作品に同封)。海外投稿者は無料。応募全座全員に入選作品集を無料配布。

応募方法

四〇〇字詰原稿用紙(B4判)を使用。なお、作品欄外に代表者の郵便番号・住所・氏名(筆名使用の場合は、本名を併記し、ふりがなをつけること)・年齢・性別・職業・電話番号・大会当日及び吟行の出欠を楷書で明記し、応募料を添えて郵送のこと。また、投稿用紙裏面に大会当日及び吟行希望者連衆の出欠数、並びに出席者氏名・住所・電話番号を記入。なお、海外投稿者の作品もすべて日本語表記に限る。

応募先

〒七九〇 愛媛県松山市一番町四丁目四十二 愛媛県庁内
第5回国民文化祭愛媛県実行委員会事務局「文芸大会」連句係

募集期間

平成二年二月一日(木)～四月二十日(金)(当日消印有効)

審査員

阿片瓢郎・赤田聰雨・秋元正江・磯直道・今泉宇涯・宇咲冬男・大林柚平・岡本春人・草間時彦・国島十雨・小林しげと・重松冬楊・近松寿子・土屋実郎・永田黙泉・東明雅・福井隆秀・松永静雨・松村武雄・宮下太郎(五十音順・予定)

賞

文部大臣奨励賞 国民文化祭実行委員会長賞 愛媛県知事賞
愛媛県教育委員会教育長賞 松山市長賞 松山市教育委員会教育長賞 第5回国民文化祭愛媛県実行委員会賞ほか(予定)

【連句大会 (入場無料)】

日時

平成二年十月二十日(土) 午前九時～午後四時三十分

会場

子規記念博物館 〒七九〇 愛媛県松山市道後公園一丁目三〇
JR松山駅より市内電車で十五分(道後公園前下車)

記念講演

講師 暉峻 康隆 先生

日時

平成二年十月二十二日(日) 午前十時～正午

会場

愛媛県民文化会館メインホール
〒七九〇 愛媛県松山市道後町二丁目五一

【合同文芸大会・吟行】(入場無料)